

AFCフォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

7

2017

特集 農業フロントの躍動女性



農業フロントの躍動女性

3 女性の能力が農業収益増に寄与する

日本公庫情報企画部

女性の経営への関与が収益増に寄与しているというデータ上の結果を受けて、要因をさらに探るため現地調査をした。女性の存在感が際立つ事例を示そう

5 女性の経営参画事例

7 現地調査レポート

11 女性の活躍を農政が推進する意味

佐藤 一絵

女性農業者が活躍できる環境づくりは長く課題であり克服には至っていない。女性活躍を推進する農政の基本的な考えや先進的事例の「見える化」を意識した最近の施策を紹介

情報戦略レポート

15 飲食業など景況改善動き足踏み 人手不足などがマイナスに作用

—生活衛生関係営業の景気動向等調査—

経営紹介

変革は人にあり

25 八戸中央青果株式会社／青森県 横町 芳隆

攻めの姿勢で市場改革に取り組み、地方卸売市場の復権を目指す。農業現場の人手不足には実際に足を運び、さらに仲卸と連携し市場活性化に注力する

経営紹介

33 小澤農園株式会社／滋賀県 小澤 一磨

講習会などの情報を敏感に捉え個人名を冠する米やコンニャク芋の生産に精力的に取り組む。地域に貢献する事業展開を目指す農業者を紹介

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。



撮影：鎌形 久
北海道網走郡大空町
2010年7月撮影

二条大麦の穂

■ 若い穂は天を差し、風に合わせて長く繊細な芒(のぎ)を優雅に揺らす ■

シリーズ・その他

観光望気

訪日観光客の日本食 伊藤 元重 2

農と食の邂逅

株式会社寺田農園／岐阜県

寺田 真由美

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

母の読み聞かせ 松浦 弥太郎 22

主張・多論百出

全日本農商工連携推進協議会

都築 富士男 23

耳よりな話 183

忍者の干し肉が伊賀牛の元祖 加茂 幹男 28

まちづくりむらづくり

住民の潜在力を引き出す

きっかけは一からつくった「山笑い」

木滑里山保全プロジェクト/石川県白山市

小杉 裕香 29

書 評

内山 節 著

『半市場経済 成長だけでない「共創社会」の時代』

村田 泰夫 32

『事業性評価融資』のご案内 35

インフォメーション

農商工のマッチングにより六次産業化を支援

岡山支店 36

「福岡県認定農業者トップセミナー」を共催

福岡支店 36

起業分野の一つとして農業を学ぶ 情報企画部 36

創造力あふれる高校生のビジネスプランを大募集

グランプリ運営事務局 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第12回アグリフードEXPO東京2017 38

望天 観気

訪日観光客の日本食

日本政府観光局（JNTO）によると二〇一六年、日本には年間におおよそ二四〇〇万人ほどの外国人観光客が来ている。第二次安倍内閣の始まる前の二二年には八三五万人ほどであったので、四年で訪日外国人が約三倍に増えたことになる。観光戦略としては大成功である。重要なことは、訪日外国人観光客の多くが、日本の食文化や食材に触れているということだ。日本の食べ物を口にして、その良さを知る。彼らは帰国しても、日本食を食べたいという気持ちになるのだろう。その証拠に、世界中のどここの町でも日本料理店が増えている。中には怪しげな「何ちゃって日本料理屋」も多くあるが、訪日して本物の日本食を食べた人には、そうしたインチキ日本料理では物足りないはずだ。

訪日外国人観光客は今後もさらに増えることが予想される。しかし、フランスには年間に八〇〇〇万人以上、スペインには六五〇〇万人、イタリアには四五〇〇万人ほどが来訪するそう。欧州では多くの人がこの域内を訪れており、それが大きな観光客数となっている。人口が多いアジアでは、これからますます観光客が増えていくはずだ。いずれは欧州の状況を超えるかもしれない。当然、日本に来るアジアの人々も増えるだろう。

日本からアジアへの食料品や食材の輸出は、まだ大した規模ではないが、ただ前述のようなトレンドを考えると、今後は急激にアジアへの農産物輸出が増えていくことが期待される。米国やオーストラリアのような広大な国土を誇る国だけでなく、フランスやオランダのような国でも積極的に付加価値の高い農産物を海外に輸出している。近隣に多くの人口を抱える国があることは、日本にとっても同様に農産物輸出の有利な条件となる。

当面重要なことは、観光客として日本に来た外国人にできるだけ多く、質の高い日本食を食べってもらうことだ。高価な料理というよりは、ラーメンのような大衆料理の方が良いかもしれない。また、地方の特色のある料理を食べってもらうことも有効だろう。

旅の大きな楽しみの一つは、その地方の郷土料理を食べることであると私は思う。これは、どの国から来る観光客でも同じはずだ。



東京大学 名誉教授
学習院大学 教授

伊藤 元重

いとう もとしげ

1951年静岡県生まれ。74年東京大学経済学部卒業。78年米国のチェスター大学大学院修了、79年経済学博士号(Ph.D.)取得。専門は国際経済学、ミクロ経済学など。東京大学大学院教授などを経て2016年より現職。政府の経済財政諮問会議議員、復興推進委員会委員長など政策の実践現場で多数の実績を有する。

言葉で伝えなくとも
消費者の息遣いを
感じるような農業
嫁ぐとき、両親に誓った、
かつこいい農家になる

農と食
の邂逅

寺田 真由美 さん

岐阜県高山市
株式会社寺田農園 代表取締役

飛騨地方の方言で野菜を作る畑を前菜畑という。消費者の感想が知りたいと、共同出荷の一部を直売所へ。みずから先頭に立ち農園経営をけん引し、レストランなど農をベースにした女性経営者の夢は膨らむ。





P19:高山市生まれの真由美さん。高校を卒業後、ホテル勤務を経て結婚と同時に就農。「機械作業は好き」とさっそうと乗りこなす P20:事務所前にはディスプレイされた加工品が並び(右) 農場での春作業はビニールを張るところから始まる。冬には雪が1m程度積もるため、ビニールは撤去する(左上) 加工施設では衛生管理を徹底(左下右) トマトの小さな苗。7月中旬には収穫が始まる(左下左)

かっこいい農家になります

結婚と同時に就農し、トマト作りを始めた。「夫は水管理や機械操作といった仕事ですが、私は脇芽かきや収穫など補助的な仕事。腰も痛いし(笑)。夫に『ずるい』と言いつつ、トラクターに乗る仕事もさせてもらいました」と、寺田真由美さん(四二歳)はほほ笑む。しとやかな所作からは想像しにくい勇ましい一面をのぞかせる。

地元の女性農家のために栽培研修会を開いてほしいと農業改良普及センターに掛け合ったこともある。「多くの女の人は言われた作業を淡々とする感じ。作業がトマトの味にどう影響するのか基本を知りたいと思いました」。なぜマルチは白色や黒色があるのか、土壌の性質によって水持ちがどう違うのかなど、普段から疑問に思っていたことを普及員にぶつけた。

標高八〇〇m前後の高原地帯で、昼夜の寒暖差を活かして作られる高山市の夏秋トマト。農協を通じて、主に関西市場に出荷され、産地ブランドも確立されている。寺田家もJA出荷を基本としていたが、トマト作りの技術を習得するにつれ、真由美さんは「食べた人の感想が聞きたい」という想いが強くなり、わずかではあるが近くの直売所で販売するようにになった。「売れた時の喜びはひとしお。前菜畑で作った他の野菜も持って行ったり」前菜畑とは、飛騨地方ならではの言い方で多種野菜を作る畑のことだ。夫の正樹さんは、

さまざまなことに挑戦する真由美さんを「何でもやったらいい」と温かく見守ってくれた。

一九九七年、正樹さんが企画した田植え体験イベントに手伝いとして参加したのがきっかけで二人は出会った。娘が農家に嫁ぐことをためらう両親に、「かっこいい農家になるから」と真由美さんは誓った。「肉体的には大変でしたが、作業を終えた帰り道に見る夕日がとてもきれいで。こうした景観と共に農業という仕事はあるんだと思いました」と話す。

加工、そして店舗出店へ

二〇一〇年、人を雇用し持続性ある経営を目指し法人化した。同年に加工施設を建て、トマトを活用した六次産業化に本格的に乗り出すことにした。

出荷するには熟し過ぎたトマトや規格外のトマトを「せっかくなの価値あるものだから」と、地元の加工施設を借りてジュースに加工してきた。非営利目的の加工場だったため、できたジュースは周囲の人にお裾分けするしかなかった。「こんなにおいしいのに販売しないの?」との声に、真由美さん夫婦は自前の加工施設の立ち上げを考えはじめ。年間を通して安定した収入を得るためにも加工施設は必要だった。

トマトの収穫時期は七月中旬から一〇月下旬まで。一年間の収入をこの四カ月で稼ぎ出してきたが、法人化して社員を雇用していくには通年の作業と収穫期以外の売り上げ

を確保し経営を安定させる必要があった。

自宅の敷地内に建てた加工施設ではジュース以外に、ペーストやピューレも作る。施設の稼働率を上げるため、地元のリングゴ農家や知り合いの農家に声を掛けて、受託加工も始めた。今では七割まで稼働率が上がった。

一四年、観光客でにぎわう古い街並みに、



左から真由美さん、生産現場のリーダー的存在のスタッフである山岸敏行さん(30歳)、美孝さん、正一さん。スタッフの肥沼吹雪さん(20歳)

寺田家の屋号を冠した「アンテナショップ」庄兵衛さん家の「とまじゅう」を出した。「高山がトマトの産地と知る消費者は多くはない。観光客でにぎわう地の利を活かしたいと思いました」と語る。

「とまじゅう」という店名の通り、棚全体がトマトジュースで埋め尽くされている。一番

の「売り」は併設のカフェコーナーで飲み比べができること。異なる三種類のトマトジュースを飲み比べてみると確かに味の違いが際立つ。飲んだ人から「同じトマトなのに品種によつてこんなに味が違うの?」と驚かれるそうだが、その通りだ。

三種類の中で一番人気は、「ピッコラルージュ」というミニトマトを使った「うたてえ」。

「うたてえ」は飛驒弁で「最上級の感謝」を意味する。一八〇ミリットルで六五〇円と値は張るが、ピッコラルージュを二〜一五個も使用しており、濃厚な口当たりと引き立つ甘さで「とまじゅう」の看板商品になっている。「観光客だけでなく、贈答用などに地元の人が購入してくださることが本当にうれしい」。そう言った時の真由美さんの笑顔が印象に残る。残念ながらこの笑顔を見ないまま、一四年、くも膜下出血により正樹さんは四九歳で急逝した。

改めて生産に軸足を置く

自らが先頭に立ち農園を引っ張っていく立場になった。その苦労は想像をはるかに超えるはずだ。しかし私が出会った真由美さんはしっかりと前を向いていた。

法人化して以来、生産、加工、販売と全般に関わってきた真由美さんだが、今改めて生産に軸足を置くようになった。加工や販売部門を担うスタッフが育ったこともあるが、「農業生産がしっかりしていないと何も始まら

ない」という思いがだんだんと強まってきたと言う。

力を入れていることは生産システムの「見える化」だ。おいしいトマトを作るための肥培管理は正樹さんや生産部門を担う社員の「さじ加減」に頼るところが多かった。それができるだけ見える化し、誰もが同じ管理ができるようにしたいと考えている。そのために、作業内容を克明に記録し、必要に応じて写真に残す作業を進めている。

また、正樹さんの両親である正一さん(八〇歳)、美孝さん(七五歳)らベテランの知恵と技術を受け継ぐことにも心を配る。「道具が壊れても簡単に直すなどベテランは甲斐性を持つてますよね。こうした知恵を伝えていくことも大事だと思っています」と言う。

向こう五年で生産基盤を盤石にし、反収を上げていくことが目下の目標。そして次の目標はレストランをオープンすること。真由美さんは夢を膨らませる。

「お客さんに畑に来てもらい、好きな野菜を摘んでもらう。つまり畑からバイキング。それを、好みに合わせてレストランのシェフが料理する。できるだけ素材の良さを活かして。言葉でとやかく説明しなくてもおいしさがじかに伝わると思っています。そんな消費者の息遣いを近くに感じられるような農業をやっていききたい」

一四人のスタッフとスクラムを組んで、真由美さんはまさにカッコいい農業をしている。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)

先日、実家に帰った際、一人暮らしをする老いた母と一日を過ごした。ぼかぼかとした昼下がり。母は古ぼけた一冊の本を手にして、僕の横に座った。

「そういえば、あなたはこの本が好きだったわよね。この本、何度読んだことでしょうね」。しわくちなな母の手の中には、サン・テグジュペリの『星の王子さま』があった。

「懐かしいなあ。まだその本、家にあっただんだ」。

幼い頃、テレビが無かったわが家では、母が毎晩してくれる本の読み聞かせが、なよりの楽しみだった。

母は、本の登場人物に合わせて声色を変えるのが得意で、物語を聞いていると、すぐそこに、あたかも登場人物が立っているかのようだった。僕は、母の声を聞きながら、時にははらはらし、時に面白く、時に悲しくなつて、物語を楽しんだ。

「久しぶりに読みましょうか」と母は言った。

「キツネのところがいいな」。「そうそう、あなたはそこが大好きで、私はそこばかりを読まされたわ」と母はほほ笑んだ。

「こんにちは」「ここのよ、リンゴの木の下だよ」と始まる、王子さまとキツネが出会う場面が、僕は大好きだった。

老眼鏡を掛けた母が、静かに物語を読み始めた。

「ぼくと遊ばないかい？ ぼく、ほんとにかなしいんだから……」と、王子さまの声を母がまねて読んだ途端、王子さまの長いスカーフと、キツネの伸びた耳のシーンが、僕の目にはつきりと浮かんできた。

淡々と物語を読む母の横で僕は、その母の声が、いつか読み聞かせをしてくれていた頃と、一つも変わっていないと思つた。静かで優しく温かく、僕の耳から入って、胸の深いところに染み入るようだった。

一通り読み終えると、「はい、今日はここまで。また明日。終わり」と、あの頃と同じ終わり方で、母は本を閉じた。

「どこが面白かった？」「キツネが王子さまと仲良くなるところ」。こんな母と僕のやりとりもあの頃のままだった。

「また今度続きを読みましょう」と母は言つて、『星の王子さま』を、いつまでも大切に手でさすっていた。

F



エッセイスト
松浦 弥太郎

まつうら やたろう
1965年東京生まれ。エッセイストとして活躍後、『暮らしの手帖』編集長を9年間務める。現在は、ウェブサイト『くらしのきほん』を手掛ける。NHKラジオ第1『かれんスタイル』レギュラーパーソナリティを務める。

母の読み聞かせ

都築 富士男 (七七歳)

全日本農商工連携推進協議会 会長



● つづき ふじお ●
一九四〇年高知県生まれ。大学卒業後、ダイエーに入社。コンビニエンスストア・ローソン再建のため米国から帰国。その後、上場会社の社長就任を経て独立。現在、現職並びに株式会社都築経営研究所代表取締役を兼任。内閣官房地域活性化伝道師。雑誌『農業応援隊』の発行人として農業・農村の支援活動を行っている。

わ

が国は、他の先進国に比べてあらゆる産業で女性の参加が進んでいない、と言われていきます。しかし、人口減少社会の到来が予測される中で、潜在的能力を有する女性の産業への参画が今後、ますます必要になってきています。

アメリカでは、一九七二年に公民権法が改正され、しかも雇用機会均等法が制定されたため、女性の社会進出が急激に進みました。

わが国でも八五年に男女雇用機会均等法が制定され、翌年施行されましたが、二〇一五年の農業就業者数は、この五年間で二〇%（五〇万人）減少し、二〇九万人となっています。また、平均年齢は六六・四歳と高齢化が進み、将来の農業の担い手となる五〇歳未満はわずか一二%です。

わが国の農業が衰退するのは、農家の所得が低いからです。その最大の原因は、農業が抱える解決しなければならぬ課題を解決せずに放置し続けたことに起因します。

今、農業の分野で女性の活躍が注目されています。かつて、農業分野での女性の仕事は、男性の補助的作業が中心でした。

しかし、食品の加工、販売やインターネットなど男性より女性が得意とする分野が増え、単なる労働力としてだけでなく、女性ならではの視点によるさまざまな取り組みで能力を発揮し、成果を上げてきています。

そうした女性が活躍している取り組みの、幾つかの事例をご紹介します。

第一は、『ホームレス農園』の著者であり、神奈川県藤沢市で「菜園体験コトモファーム」の主宰としても活躍されている小島希世子さんの取り組みです。

ホームレスは、仕事がなく働けない一方、農家は人手がなくて困っています。この二つを結びつけばよいのではないかと考えた小島さんは、藤沢市に農地を確保し、ホームレスやニートに農業を教え、就農支援などを続けています。

第二は、青森市で「おやさいクレヨン」を開発・販売されている木村尚子さんの取り組み事例です。

赤ちゃんが絵を描きながらクレヨンを食べしてしまう姿を見て、口に入れても安全なクレヨンを作ろうと決意。ピーマンやブロッコリーなどの野菜を粉末にし加工したものを活用して、安全なクレヨンを開発しました。それだけでなく、「ふるさと名品オブ・ザ・イヤー二〇一六年」を受賞するなど、さまざまなメディアにも取り上げられ、その活躍ぶりが紹介されています。

第

三は、東京から高知県四十市に移住し、「日本防災植物協会」を設立、事務局長として活躍されている斉藤香織さんの事例です。

「防災植物」とは「山野に自生する植物の中から、災害時、食糧難になった時でも安全で簡易に食せるもの」と定義されていますが、斉藤さんの場合、親子で野山に行き「防災植物」の知識や野菜ソムリエ上級プロの知識を活かして「防災植物の調理法の普及」を目指す活動を続け、大きな反響を呼んでいます。

第四は、和歌山県みなべ町の梅農家に嫁ぎ、夫が生産した梅を販売する会社を自身で設立した垣淵浩子

さんの事例です。農家に嫁いだ女性は、労働の対価だけのお小遣いをなかなかいただけないのが現実です。ところが、垣淵さんは、自分の小遣いは自分で稼ぐのだと、ご主人が栽培した梅を販売する「株式会社南高梅ワールド」を設立し代表取締役となり、全国各地で梅漬けの講習会をはじめテレビにも出演、そして農業女子プロジェクトのメンバーとして活躍中です。

これらの事例を見てもお分かりのように、男性がなかなか思い付かないような発想による、さまざまな取り組みが現場で大きな力になっています。今、農業に限らず、介護や福祉、あらゆる産業の現場において女性の能力活用が企業の成長を左右する時代になってきた、と言えます。

今後、女性の活躍が日本の労働力不足を補う可能性を広げるには量的側面だけではなく、質的側面にも注目する必要があります。そのためには、育児や介護などさまざまな課題を克服して、女性がこれまで以上に積極的に進出し活躍できる社会を実現していくことが必要だと思います。私は、女性の活躍がわが国の発展の原動力になるだけでなく、今や社会を変える起爆剤になると確信しております。



女性ならではの視点や得意分野を活かせ 女性の活躍をわが国発展の原動力にする

忍者の干し肉が伊賀牛の元祖

— 畜産碑めぐり (15回) 伊賀牛発祥之地 —

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

加茂 幹男

Ｊ 関西本線の新堂駅（三重県伊賀市）から南におよそ二キロメートル、壬生野郵便局の五〇メートルほど北に「壬生野福祉ふれあいセンター」があり、この敷地の南西端のフェンス内側に「伊賀牛発祥之地」と刻まれた石碑が建てられています。

説明板には、「伊賀地域で古くから農耕用として飼育されていた和牛が昭和三〇年代に入り戦後の復旧が整い、所得の向上と農業の機械化が相まって、牛肉需要の飛躍的伸びから専門的な和牛肥育が芽生えてきた。当時、伊賀町壬生野農協で六名の農家グループが十六頭の素牛を肉牛預託制度を利用して協同購入し、技術の研鑽・肉牛販売の統一等、共同実践した事が生産者組織での伊賀牛発祥とされている。

以後、町全体さらに大山田、阿山町、伊賀全体へと波及的な広がりをみせた。又、各市町村、各農協、経済連の推進努力により『肉の横綱伊賀牛』にふさわしい銘柄牛作りが現在も行われている。」と記載されています。

「伊賀牛」は、伊賀産肉牛生産振興協議会会員が飼養管理する黒毛和種の雌の未經産牛で、最終肥育地として伊賀地域（伊賀市・名張市）で二カ月以上飼われ、肉用として出荷される牛と定義されています。



「伊賀牛発祥之地」碑（ＪＡいがほくぶ宮農生活センター 松田英靖氏提供）

三重県の牛肉といえば「松阪牛」が有名ですが、伊賀牛はこれに匹敵する味と評価され碑にある通り「肉の横綱」とも呼ばれています。伊賀牛の歴史は古く、一三二〇年に書かれた国産牛の図説「国牛十図」に伊賀牛のことが記載されているほか、伊賀忍者が戦時食としてたと伝えられる「干し肉」こそが、伊賀肉の元祖とも言われています。

く の伊賀牛の基礎をつくった人は、東京の肉屋に奉公していた金谷清三郎氏です。一九〇五年、金谷氏が初めて伊賀から東京へ肉牛を出荷して以来、積荷が年々多くなり、二三年には上野市茅町に畜産組合が創立されました。この頃には月間約四〇〇頭の肉牛が東京に出荷されるようになり、伊賀牛の名声が全国的に高まりました。

伊賀牛振興協議会が設立された五三年五月、全国肉牛共進会に戦後初めて伊賀牛として出品した肉牛が、厚生大臣賞を受賞しています。

六二年には肉牛の生産振興を目的とする伊賀産肉牛生産振興協議会が発足し、組織の結成とともに飼育頭数が増え、伊賀牛の本格的な生産基盤が確立されました。また、七五年には伊賀牛青少年クラブ（現伊賀牛青年部）が結成され、飼養管理技術の向上に取り組んでいます。

F



Profile

かも みきお
1950年北海道生まれ。岩手大学農業機械学科卒業後、農林省東北農業試験場入省。農林水産技術会事務局、(独)農研機構近畿中国四国農業研究センター四国農業研究監、(独)農研機構畜産草地研究所草地研究監などを経て、2010年から日本政策金融公庫に勤務。専門は畜産草地で、主な研究対象は飼料の収穫・調製・給与など。

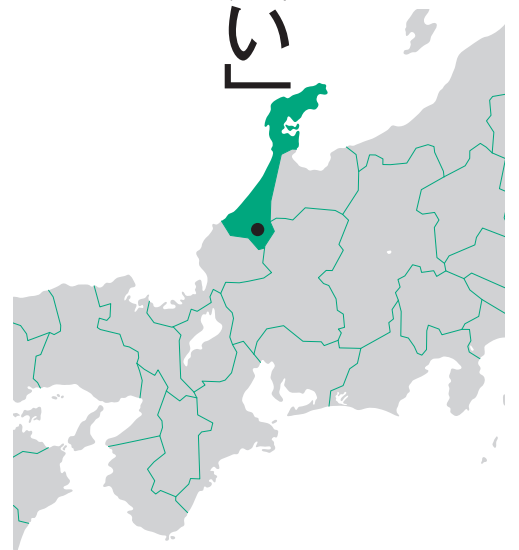


住民の潜在力を引き出す きっかけは「からつくった」山笑い

石川県白山市

木滑里山保全プロジェクト

小杉 裕香



お祭りは地域資源で

「山笑い」。これは、石川県白山市の木滑地区^{まきめり}で二〇一〇年から開いている楽しい里山祭りの名前です。現在、春、秋、冬の年に三回、開催しています。県内はもとより遠くは関東地方や九州などから多くのお客さまが来訪する地区のビッグイベントです。例年、二・五^ト以上の積雪があるような雪深い厳冬の一月末の日曜日に冬の「山笑い」は開催されます。「一面雪の世界で遊びましょう」をコンセプトに趣向を凝らした五つのイベントを用意しています。

「雪あそび」では、木滑地区のおじちゃん特製の高さ三^トもある巨大すべり台がお目見えします。他に雪山をソリや肥料袋で滑ったり、雪だるまや雪の中に地下迷路を作ったりして遊んでもらいます。

「かんじきウォーク」は、都会の人たちにはなじみのないかんじきを履いて雪山を歩きます。案内

役は、実際にかんじきを履いて山へ入り、イノシシやクマ猟をしている木滑地区の猟師さんです。参加者は冬の動物の生態を教えてもらいながら動物の足跡を探したりします。

また「きなめり雪かき道場」は木滑地区にある三集落(四七世帯、約二〇人)を回り、おばあちゃん家の前の雪かきをしてもらうものです。実は、雪の中に木工工芸品や神社市の食べ物と交換できる番号札が埋めてあって、参加者はそれらを掘り当てるといふ楽しみがあります。

交流センターの施設内で行う「里山の手しごと」はわらを使った草履編み体験をしてもらうもので、先生は木滑地区のおじいちゃんやおばあちゃんです。おじいちゃんやおばあちゃんが小学生の頃、放課後、外に出て遊びに行く前にしなければいけない仕事にわらから縄をなうことがあったそうです。手しごとの先生が手のひらにわらを乗せてくると動かすと、縄になって出てくるため「魔法のよう」と感じる生徒も多いです。

そして「神社市」では木滑地区のお母さんが手作りの地区伝統保存料理のかつちり豆やかつちりイモなどお惣菜やイノシシ丼、クマ汁などジビエ料理を提供しています。

春の「山笑い」は、耕作放棄地の田んぼを自然栽培の田んぼに再生しようと農家から田植えを習ったり、木滑で放牧している羊の毛を使ったフェルト工作が中心です。秋の「山笑い」は春の田んぼの稲刈りとハサ干し体験などです。いずれの「山笑い」でも「神社市」でお母さんのおいしいお料理を楽しんでもらっています。

「山笑い」の最大の特徴で自慢したいことを申し上げましょう。それは、このお祭りは木滑地区の素材ばかりでできていることと、地区の人たちと私たち部外者が一からつくったあげたものだということです。

そこで「山笑い」がどうやってつくられていったか、どういった想いが込められているのか、さらには部外者である私たちがどのように木滑に関

profile

小杉裕香 こすぎ ゆうか

1981年石川県金沢市生まれ。株式会社G-VOICE代表取締役。高校卒業後、5年間アメリカに留学し民族学、国際関係を学び、その後帰国し、東京で就職。2010年金沢市にUターン、木滑地区の地域活性化活動に携わる。11年、イベント制作会社のG-VOICEを設立。石川県内の里山地域の活性化活動に取り組んでいる。

木滑里山保全プロジェクト

過疎高齢化の進んだ石川県白山市の里山集落「木滑地区」にて、地域外の有志が集落に入り込む形で住民とともに企画段階から活性化活動を行う。耕作放棄地の再生や森林整備などの環境保全活動に加え、伝統行事の復活や年3回開催する地域の資源を活かした里山祭り「山笑い」を中心とした交流事業を行う。

わっていったかなどをお話ししましょう。

サルが闊歩する集落

私は、父が経営する企画制作会社の事業の手伝いで木滑地区を初めて訪れました。長く続く山道をサルの大群に興奮しながら車を走らせ、たどり着いた木滑地区は緑にあふれていました。私は、その時、都会では当たり前の建物が一切ない山、そして川に囲まれた壮大な空間に圧倒され、さらに大自然に囲まれた朝は穏やかだけれど力強いことに驚きました。

しかし、木滑地区は残念ながら炭焼きなどの山の仕事ができなくなり、若い人はほとんどが地域外に出てしまい、六〇歳代の人たちが地区で若い衆と言われる状況で、二〇年後には集落の存続が危ぶ



上：「山笑い」の様子。雪あそび（右）と里山の手しごと（左）
下：復活した地域伝統の盆踊り「あさんがえし」

まれる地域でした。以前は、高台に美しい棚田が広がっていたのですが、年を取った体には毎日上るのは厳しく、さらに、狭い道しかない地区の田んぼは機械化された現代の農業の波にはついていけなかったのでしょうか。ほとんどの田は耕作放棄地となっていました。このため、人が入らなくなった場所は四〇匹ほどのサルの群れが闊歩し、地面にはイノシシが大きな穴を開けていました。動物との緩衝地帯がどんどん里の方に下りてきて、サルは集落の畑まで荒らすほどでした。「なんとかしてあげたい」。そう感じた私は木滑地区の田島二三区長に「どうか一緒に地区の活性化につながる仕事を行わせてほしい」と頼み込んだのです。それが認められ、二〇一〇年九月、県補助事業「木滑里山保全プロジェクト」が発足。プロ

あさんがえしの復活

プロジェクトメンバーを募集したところ、私を含めて五人が集まりました。しかし、メンバー全員、農業や地域おこしに興味はあるが知識が無い素人ばかりで、木滑出身の二〇歳代の女性と私を除いて、あとの三人は木滑の地区名も読めないくらい、地域のことをほとんど知らない状態でした。

プロジェクト期間は一年間。そのため私たちは「できることをどんどんやろう」と考えました。まず、自己紹介記事を掲載した地域新聞を作り一軒一軒あいさつ回りをしました。併せて区長さんからのアドバイスで、住民と打ち解けるため、地域伝統の盆踊り「あさんがえし」を復活させることにしました。これが地域の住民との交流のきっかけ

けとなりました。

区長さんが「あさんがえしを九月一九日に復活開催します。九月九日に練習するさけ交流センターに寄ってください」と地区に屋外放送をしてくれたこともあって、練習当日はほとんどの住民が集まってくれました。「何年ぶりやろ、忘れてしまったかもしれない」。そんな住民の声に不安を感じたその時、太鼓の音が鳴り八四歳のおじいちゃん力が強くなりたい始めたのです。すると、おばあちゃんたちがすつと立ち上がり踊り出し、あれよあれよという間に、その輪は広がりました。

各集落で練習をしてもらいましたが、同時に私たちプロジェクトメンバーも、その踊り方をビデオに撮り、家で猛練習をしました。そうして迎えた当日、黙々と、でも生き生きと踊る住民の人たちに、エネルギーと力強さを感じました。

実は、地域新聞でのあいさつ回りでは、「あんたたち誰や」「なんもないこの場所で、一体何ができるん」「いろんな人が来たけどすぐおらんくなつたわいね」などと住民からは辛辣な言葉を掛けられることも多くあったのですが、あさんがえしでは、「あんやとう」「あんたらも、えらいうまく踊れたがいね」と言ってもらえたのです。うれしかったです。私たちもわくわくして、この人たちと一緒に地域のパワーを活用すれば何かできると確信しました。

さつそく、あさんがえしの翌日から、プロジェクトの核となる木滑地区の何か探しのヒントを得ようと「住民全員インタビュー」を始めました。インタビューというのは主にお宅にお邪魔しておしゃべりすることです。「なんもしやべるこ

とはない」と言っていた人たちが、いざ始まると話が尽きないのです。昭和初期からの記憶が明確なおじいちゃんに地域全体を案内してもらって歴史を教えてもらったり、おばあちゃんに山で採れた山菜の保存方法や、昔の報恩講料理の作り方を教えてもらいました。

地域に入って見えたことで驚いたことの一つに、コミュニケーションの在り方があります。木滑地区は昔からの屋号でお互いを呼び合い、集落全体が一種の家族のような地域社会だったのです。

誇りと自信を取り戻す

このような密な地域社会に、豊かな自然環境、自然を活かす人間の知恵や知識、昔ながらの技術。私たちは、これらを体感して楽しんでもらうことで木滑地区に人を呼び込めるのではないかと考えました。こうして、プロジェクト開始から半年後、できあがったのが里山祭り「山笑い」です。二〇一一年二月、第一回目の「山笑い」を開きました。当日はいつも静かな木滑に大勢のお客さまが来訪しにぎやかな声が響き渡りました。住民は今まで見たこともないような景色に大慌てになりながらも笑顔があふれていました。

「あのじいさん前よりも元気になったわ。役割りを持つと生き生きするね」「手助けてしてもらってこうしたお祭りが生まれたけど、今後は私たちが頑張っていかなん」などと住民は話してくれました。

有言実行の住民は「次の山笑いはこういうがにすればいいんじゃないけ」などと事あるごとに話し合ってくれて（お酒の席も増えたとか）どんど

ん昇華し現在の形になっていったんです。今では「山笑い」の会場準備などをはじめほとんどを住民が行っており私たちの仕事は事前のリーフレット作成くらいです。もちろん、「山笑い」の進化は現在進行形です！

「山笑い」は、自分たちの地域に対しての誇りと自信を取り戻すきっかけになったと感じます。一四年には、一年間、地元テレビ局が木滑地区に密着取材を行い、「山笑い」や「あさんがえし」をはじめとする地域おこしの様子を放送してくれました。これをきっかけに来訪者もますます増えて、登山道整備や耕作放棄地の解消などにも携わってくれる方が増えていったのです。まさに好循環です。

プロジェクトの一年間が過ぎた頃に、メンバーがどうしたかについて、触れたいと思います。なんとメンバーの一人、三〇歳代の男性は木滑地区から離れたくないと移住し就農したのです。私は会社を立ち上げましたが、他のメンバーもそれぞれ収入確保の手段を見つけて、木滑地区の地域おこし活動に引き続き携わっています。

プロジェクト開始前、私は木滑地区に新しいことをもたらせば元気になると考えていたのですがそれは間違いでした。私たち部外者が行ってきたことは木滑地区に、もともとある宝物、地域資源を住民が見つけるのを手伝ったことくらいです。きっかけがあれば住民たちの潜在力が噴き出すことを強く感じています。

今、高齢化による人口減で大切な知恵が途絶えてしまう厳しい現実がありますが、木滑地区の山々に笑い声が響き渡るよう、これからも住民と一緒に活動を続けます。

『半市場経済』

成長だけでない「共創社会」の時代

内山 節 著



(KADOKAWA・800円 税抜)

資本主義社会の後の社会とは

村田 泰夫

(ジャーナリスト)

「農業は資本主義になじまない」

この書評欄の筆者の一人である宇根豊さんの信念である。農業は天地自然から恵みを受け取っている。効率や成長を求める市場経済の原理を当てはめること自体に無理がある。社会の土台に農があるという「農本主義」を宇根さんは提唱する。

日本をはじめとする主要先進国の金利は、ゼロだったマイナスだった。投資しても利潤が見込めない。先進諸国の産業資本は投資先を新興国に移す。グローバル化した世界で、目立つのは強欲な金融資本の跳躍ぶり。一六世紀以来、世界経済を支えてきた資本主義は、終焉を迎えようとしているかのようだ。

資本主義が終わった後の社会は、どんな社会なのだろうか。かつて資本主義は革命で打倒さ

れ、社会主義が来るべき社会だと信じられていた時があった。しかし、ソビエト連邦の崩壊で社会主義が未来の社会だと信じる人はもういない。この本の筆者である内山氏は、社会はひとつのシステムで営まれてきたわけではないと言う。ひとつの時代の中で育まれていた萌芽が次第に力を付け、それが主導的な役割を果たすようになった時、新しい時代が生まれる。

現在の資本主義という社会も、そうやって生まれてきた。資本主義の後の社会が何と呼ばれる社会になるか、まだ分からない。でも、社会変革の萌芽はすでに今の世の中に存在しているというのだ。

現代社会は、市場経済、非市場経済、半市場経済の三種の経済が併存している。今は市場経済がわが物顔で居座り、市場に任せれば「神の手」によって予定調和的に経済は回ると信じられてきた。しかし、市場経済に任せていたら不公平で格差の著しい社会になってしまった。

閉塞感が強まる現代社会にあって、市場を活用しているが市場原理だけでは営まれていない半市場経済が存在感を増している。例えばNPO法人であり、社会的企業の活躍である。

利潤の極大化や成長のみを求めるのではなく、仲間と共有できるような価値を大切に作る共創社会を目指す。活動の目的が市場経済の原理から外れた、半市場経済が主導する社会の到来を内山氏は予感する。農業は半市場経済になじむ。宇根さんもきっと安心することだろう。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2017年5月1日～5月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 ルポ 農業新時代	読売新聞経済部／著	中央公論新社	860円
2 稼げる農業 AIと人材がここまで変える	日経ビジネス／編	日経BP社	1,200円
3 るるぶ 東京の農業 林業 水産業	JTBパブリッシング／編	JTBパブリッシング	860円
4 2025年 日本の農業ビジネス	21世紀政策研究所／編	講談社	800円
5 農業と農政の視野／完 論理の力と歴史の重み	生源寺 真一／著	農林統計出版	1,800円
6 ITと熟練農家の技で稼ぐ AI農業	神成 淳司／著	日経BP社	1,800円
7 新版 キーワードで読みとく 現代農業と食料・環境	「農業と経済」編集委員会／監修、 小池 恒男、新山 陽子、秋津 元輝／編	昭和堂	2,400円
8 森林業 ドイツの森と日本林業	村尾 行一／著	築地書館	2,700円
9 改訂版 逐条解説 農地法	高木 賢、内藤 恵久／編著	大成出版社	5,200円
10 農林水産六法 平成29年版	農林水産法令研究会／編	学陽書房	14,000円

『事業性評価融資』のご案内

次代を担う農業の担い手が取り組む攻めの経営展開を支援するため、お客さまの「経営者能力」や「経営戦略」を、より積極的に評価する新たな審査スキームとして事業性評価融資を取り扱っています。

* * * * *

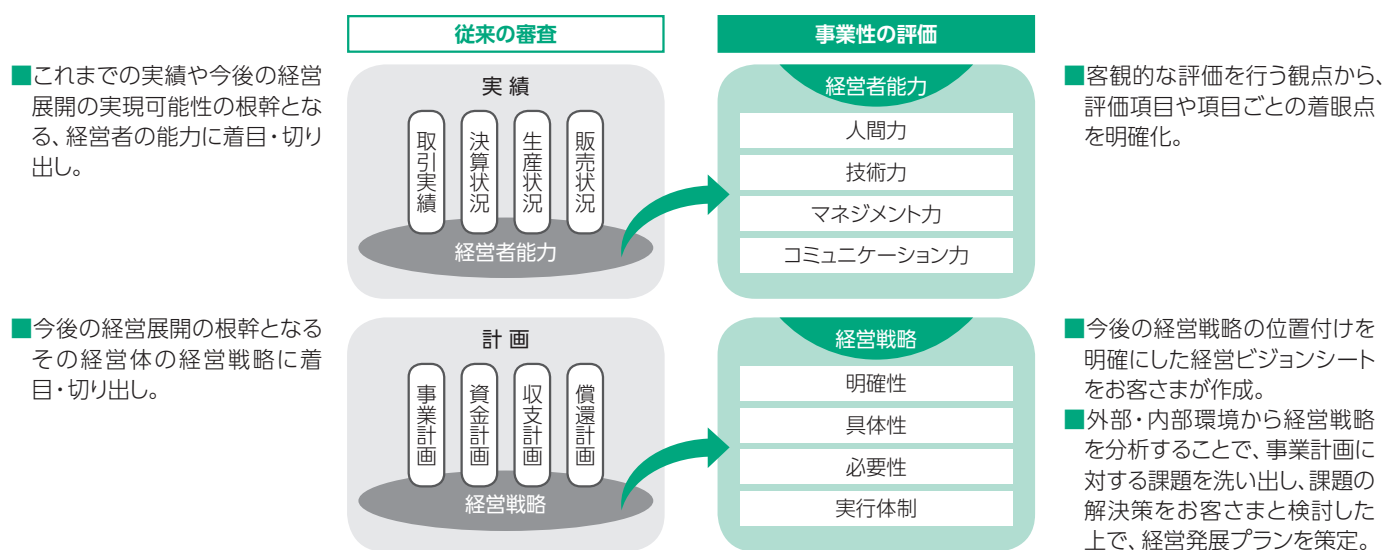
事業性評価融資により、ご自身では気付きにくい経営の強みを活かす方法や弱みの打開策を公庫と一緒に検討し、課題解決のための提案と融資後の濃密なフォローアップを通じて、経営目標の達成に向けて強力にサポートいたします。

事業性評価とは

金融機関が現時点での財務データや保証・担保にとらわれず、企業訪問や経営相談などを通じて情報を収集し、事業の内容や成長可能性などを適切に評価することです〔円滑な資金供給の促進に向けて〕(2015年7月金融庁)。

事業性評価融資の仕組み

経営者能力(経営実績や今後の経営展開の実現可能性の根幹)と、経営戦略(今後の経営展開の根幹)を切り出して評価します。



事業性評価融資の流れ

- 1 相談**

お客さま 経営の悩みなどを公庫にご相談ください。

外部環境 TPP、農地中間管理機構、災害、鳥インフルエンザ・口蹄疫の発生 など

内部環境 法人化、6次産業化、経営継承、農地の分散解消 など
- 2 経営ビジョンシートの作成・提出**

お客さま 強み・課題の抽出、将来ビジョンなどをお客さまご自身で経営ビジョンシートに整理してご提出いただきます。
- 3 事業性評価書のフィードバック(事業性の評価)**

公庫 経営ビジョンシートを基に、経営課題他について事業性評価書にとりまとめ、お客さまにフィードバックします。
- 4 経営発展プランの作成・提出(融資決定・契約の締結)**

お客さま 事業性評価書を踏まえ、今後の経営戦略と戦略を実施する上での課題や具体的な行動計画を、お客さまと公庫と一緒に検討し、経営発展プランにまとめ、公庫にご提出いただきます。

公庫
- 5 融資後の経営支援**

公庫 経営発展プランの実現に向けて、販路開拓・マッチング・経営診断など、融資以外の経営支援を行います。

ご留意いただきたい事項

- 事業性の評価は通常の審査に加えて実施するもので、事業性の評価結果のみで融資の可否を判断するものではありません。
- 資金ごとに対象者・用途などの要件があります。詳しくは、最寄りの日本公庫支店農林水産事業までお問い合わせください。



竹村氏から6次産業化のポイントを学ぶ参加者

農商工のマッチングにより 六次産業化を支援

農林漁業者や商工業者など約一六〇人が参加し、「ちゅうぎん6次産業化セミナー&交流会」を中国銀行と共催しました。

県内産農産物・加工品などの直売所「おばあちゃんの台所」を運営する株式会社岡山直売所ネットワーク代表取締役の竹村仁量氏（じりょう）が、「おばあちゃんの台所発！ 人気商品づくりの勘所」と題し、六次産業化や農商工連携での商品づくりのポイントなどを講演。交流会では、活発な情報交換がなされた他、延べ一二三件の有意義な商談が行われました。三月二六日、於：岡山市中国銀行本店 （岡山支店）

「福岡県認定農業者 トップセミナー」を共催

市町村認定農業者組織の代表者や青年等就農資金を利用された新規就農者など五七人が参加し、「福岡県認定農業者トップセミナー」を福岡県認定農業者組織連絡協議会と共催しました。

初めに、九州農政局福岡県拠点地方参事官の林淳一氏が、「収入保険制度」について保険料や積立金などを詳しく解説。多くの参加者からさまざまな質問がなされ、新制度への関心が高いことがうかがえました。

続いて、熊本県南阿蘇村で施設野菜などの生産や農産加工品の製造・販売を行う有限会社木之内農園会長の木之内均氏が、「震災からの再建計画とこれからの事業展開」と題し、熊本地震による自身の生々しい被災体験と復興に向けた経営の取り組みについて講演しました。

木之内氏の前向きな経営姿勢に刺激を受けた参加者は、それぞれが抱える経営上の悩みを相談するなど、活発な質疑応答が行われました。三月二六日、於：福岡市 （福岡支店）

起業分野の一つとして 農業を学ぶ

地域で活躍する人材育成を目的に二年前に創設された大正大学の地域創生学部部に赴き、日本農業の概要と新規就農の状況および農業ビジネスの動向について講義を行いました。

現在、農業・農村の価値が再認識されており、農村が有する地域資源を活用して地域活性化を目指す動きが見られます。

今回の講義では、一次産業は地域創生の要ともいえること、さらに、六次産業化や農商工連携などを通じて、地域を支える多様な産業が相互に協力していくことが重要であるという点について地域創生や創業に関心のある学生たちに理解を深めてもらいました。

学生たちは長期の地域実習を通じて、各地域の課題を既に把握しており、今後実践につなげていくことが期待されます。

なお、大正大学と日本公庫池袋支店は地域創生分野における産学連携協定を締結しています。五月一七日、一九日、於：東京都豊島区、大正大学地域創生学部学生約二〇人 （情報企画部）

創造力あふれる高校生の ビジネスプランを大募集

全国の高校生を対象とした「第五回創造力、無限大∞高校生ビジネスプラン・グランプリ」を開催します。

次世代を担う若者を育てる「起業教育」がこれからの日本には大切であり、日本公庫創業支援の経験・ノウハウを起業教育の現場に還元したいと考えています。

前回の第四回グランプリは、全国三二四の高校から二六六二件のご応募をいただきました。七月三日よりエントリーの受け付けを開始します。お知り合いの高校生の方へぜひ当グランプリをご紹介します。電話〇三ー三三二七〇ー二三八五 （グランプリ運営事務局）



前回グランプリを受賞した大阪府立三国丘高等学校

みんなの広場

◆「主張・多論百出」の池田さんは一〇年前、不慮の事故で車いす生活になれましたが、本当にたくましい方だと感服しました。NPO法人を立ち上げ、車いすやベビーカー、お年寄りが安心して出掛けられる社会の実現を目指して活動しています。私も聴覚に障がいをもっていますが、池田さんの前向きな生き方に大いに勇気付けられました。

(広島県広島市 内惻)

◆村上さんの「特集」で二つの事例を通して、経営者の視点では発見できない経営課題を見つけ、正しい問題点を進言する農業コンサルタントの独自の力に驚きました。今後、私も農業の知識を蓄積しながら農業者の方々の一助となれるよう頑張ります。

(齊藤 圭汰)

◆「農と食の邂逅」を読んで、バラ農家に生まれ農業の厳しさを知る私にとって、経営は大きなテーマの一つでした。

小さい頃、私は両親が丹精込めて生産し出荷したバラの値段の安さに納得できませんでした。大切に育てた作物を多くの方に手に取ってもらったためにもプロデュースする大切さを知りました。(杉本 真希) ◆「まちづくりむらづくり」では、地域の課題を住民全員が共有し、課題解決に向けた意識改革を行った点

が印象に残りました。住民が地域の宝探しをして住む人にとっても桃源郷となれば、地域が活気にあふれるのだと思います。(富田 成美) 本誌五月号に寄せられた声です。

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただくことがあります。

「郵送およびFAX先」

〒〇〇〇〇〇〇四

東京都千代田区大手町一九一四

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫 農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 〇三三-三三〇一-三三三〇

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の四点です。

①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)の結果
②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向

③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
④日本公庫が発行する「AFCフォーラム」

「アグリ・フードサポート」のダウンロード
メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(<https://www.jfc.go.jp/service/mail/nourin.html>)にアクセスして登録ください。(情報企画部)

編集後記

④世界経済フォーラムが昨年発表したところによると、男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数において日本の順位は一四四カ国中二一位と、前年よりさらに順位を下げました。社会全体で男女格差が大きい現実があります。一方で子どもの学校に行くと生徒会長などは女子が多くなり、私の頃と様変わりです。社会変化に期待です。(嶋貫)

④女性農業者へ私からの手紙——今、追い風が吹いていると感じます。現地調査先の女性は各自、適した分野で活躍していました。あなたの行動で風は上昇気流になり周りをどんどん巻き込んで高い所へ導いていくことでしょう。佐藤一絵さんなど頼もしい人たちが応援しています。私は活躍するあなたの姿を想い描きます。(城間)

④女性の脳は男性と違い洞察力に優れていて、男性では考え付かない解決方法を見いだせるんだとか。決して男性が劣っているとは思いませんが、ちよっぴり胸を張りたくります。「多論百出」の都築さんは四人の女性ならではの取り組みを紹介。就農支援やお小遣いのために会社を設立した方など、女性はまさに起爆剤。パワフルさに脱帽です。(小形)

④加茂さんが連載されている碑めぐりシリーズ。ブランド牛の話題が続いたため、他にどんなブランド牛があるのか調べたところ、二〇〇以上もの銘柄があり、その種類の多さにびっくり。各産地の肥育農家が工夫を凝らし、丹精込めて育てたブランド牛。じっくり味わいたいものです。とはいえ、私にはなかなか手が届きませんが。(上原)

AFCフォーラム

編集

嶋貫 元 嶋貫 伸二 清村 真仁
柴崎 勇太 小形 正枝 城間 綾子
上原 理恵子

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>

印刷 凸版印刷株式会社

販売

株式会社日本食糧新聞社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-21-2
第一南桜ビル
Tel. 03(3432)2927
Fax. 03(3578)9432
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

■定価 514円(税込)

④ご意見、ご提案をお待ちしております。

④巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとのおんぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり農と食をつなぎます。

第12回 アグリフードEXPO 東京 2017

—— プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会 ——

日時

8月23^水日/24^木日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催



日本政策金融公庫

会場

東京ビッグサイト 東6ホール



農業フロントの躍動女性



『最高な一杯』林 永遠 福岡県福岡市立名島小学校

■AFCフォーラム 平成29年7月1日発行(毎月1回1日発行)第65巻4号(803号)
 ■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■販売/株式会社日本食糧新聞社 〒105-0003 東京都港区西新橋2-1-2 第一南栄ビル Tel.03(3432)2927 ■定価514円 [本体価格476円]



日本政策金融公庫 農林水産事業本部

<https://www.jfc.go.jp/>